「佐伯肩衝」について

佐伯　朗
（会員　東京都練馬区）

佐伯肩衝（かたつき）とは元々足利十三代将軍義輝の所持していた茶器であるが、これが転々と所有者を変えて徳川家康の持ち物となったといわれる。名前の由来は「大友興廃記」、「筑紫軍記」、「西国盛衰記」ほかに記載がある。昨年、たまたま別件でお手紙を頂いた神戸市にお住まいの今井久吉氏に、この肩衝についてご教示頂いたので報告します。今井氏は織田信長の茶頭であった今井宗久の子孫とのこと。

一、佐伯肩衝に関する記述

「大友興廃記」

去程に薩州勢麓へ引取る。折から荷物を捨て置きたるあり。是を佐伯の下々の者、拾い得て蓋を明て見るに、品々の中に肩衝ある。兎角して佐伯惟定に渡りたる。されば此肩衝の根本は、義輝公方の御所持たりしを、大友義鎮に遣され、重物と成るを家臣臼杵紹冊数奇の達者なるに依て拝領す、然るを此度薩摩州勢乱入の刻、如何したるにや島津中書の手に渡り永く他物と成べきを此度取返し惟定に留まりぬ。其後家康公御重物となる。佐伯肩衝と聞へしは是なり。

「西国盛衰記」

去程に島津中務少輔昌久、翌十七日には宇目を立ちて豊後と日向の境、梓越に懸らるる。此時佐伯太郎惟定、敵を著けて討取らんと、我身も宇目郷朝日嶽まで打ち出で先手の勢を差向くる。（中略）暫く相戦ひて後、敵味方相引に引取りけり。此合戦に薩州方に捨置きたる荷物を佐伯の雑人共拾ひ取り、蓋を開き見るに様々の物有る中に肩衝の茶入れあり、惟定是れを得て大に悦ぶ事限りなし、此肩衝は其初め公方義輝公御所持なりしを、一年大友宗麟に下さるる。其後宗麟、家臣臼杵紹冊数奇の達者たりし故、是を与へける。然るを此度薩州勢、府内乱入のとき如何して取り落としけん、中務少輔昌久の手に渡り、永く他物と成るべからしを不思議に佐伯が手に渡りけり、其後東照大神君の御重物となりて佐伯肩衝と召されしは是なり。

右の通り、将軍足利義輝から大友義鎮、次いでその家臣・臼杵紹冊の手に渡り、島津家の豊後侵攻の折り、島津家久の手に入り、それをまた惟定が奪取したのである。秀吉の九州平定後も惟定の手に留まり、大友家の除国を迎えた。

二、その後

大友家の除国後、惟定は藤堂高虎に仕えた訳だが、慶長四年に高虎から譲渡の要請があったものか、惟定はこの肩衝を献上し、代金として金子十五枚、また返礼として五百石の加増を与えられた。「高山公実録」（東京大学史料編纂所蔵）に次のような記載がある。

御所持之肩つき之儀申遣候処御越満足申候、即気ニ入申候条留置候、然者最前余所より付ね之ことく、金子拾五枚只今進之候、慥可有御請取候、委細ハ山中六兵衛可申上候、謹言

（慶長四年）二月廿二日　藤佐渡守　御判

佐伯権之介殿

御報

今度かたつき被懸御意満足候、一段気ニ入申候、然者先度金子玄蕃殿迄遣候つる、慥御請取候哉、早速持給候為褒美知行五百石進メ候、遺殿知行内五百石と可有御請取候、其旨皆々へも申遣候、猶玄蕃殿可被申候、恐々謹言

（慶長四年）三月三日　藤佐渡守　御判

佐伯権介殿

まいる

（三重県史資料編　近世1より）

山中六兵衛は高虎の近臣、玄蕃殿というのはおそらく藤堂良政のことであろう。従五位下玄蕃頭、高虎の従兄弟で関白秀次の旧臣、禄五千石を食む藤堂家の重臣である。

大友興廃記その他の記録によると家康の持ち物となったとのことであるが、肩衝が徳川家の手に渡ったのは二代藩主・高次の隠居時のことで、これは「公室年譜略」（東京大学史料編纂所蔵）の寛文九年項に次のように出ている。

此冬　公致仕の節　大樹併に役人方へ献上の品

当将軍家へ献上

一　佐伯肩衝

一　貞宗刀　代金百五拾枚の折紙右の三所物は金の倶利伽藍龍乗真作代金拾枚折紙副ふ

一　時　服　拾

一　太　刀　一腰
一　御馬代　黄金壱枚　（原文カナ文、以下略す）

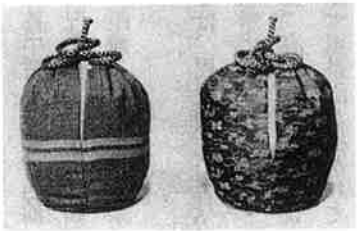
案外、当初高虎から家康に献上されて、また高虎に下されたものかも知れない。高虎・高次は茶会の席で度々此の肩衝を使用したらしく記録が残っている。

藤堂和泉様、関才ニ而、客は中坊左近様・久好二人床ニ、おそ櫻肩衝・四聖坊肩衝・さいき肩衝・上々せと肩衝　肩衝四つ飾て御茶被下る。

（原文カナ文、「松屋會記」）

その後、この肩衝がどうなったかについては「角川茶道大事典」に記載がある。

佐伯肩衝【さえきかたつき】大名物。漢作唐物茶入。大友宗麟の家臣、佐伯太郎惟定が島津昌久を攻めた時、この茶入を得たことでその名がある。……その後、徳川家康が入手、藤堂高虎に与え、その子高次が幕府へ献上。本荘家、田村家を経て奈良の中村家に納められた。形姿の整った肩衝で、初花・北野などに近似している。釉景（ゆうけい）は総体栗色地に黒飴釉が掛かり、置形は肩下から一筋黒釉が流れ下って裾土際に至っている。書付は挽家金粉字形および箱書共に小堀遠州筆である。

小堀遠州の書付があるのは高虎の娘婿であったからか。というわけで、現在は奈良市の寧楽（ねいらく）美術館（水門町七四依水園）に納められているとのことである。惟定の手を放れてより約四百年、次々に主を変え今に残る肩衝の由来には大変興味深いものがある。

大名物　漢作肩衝茶入　銘　佐伯